

黒の森からオーバーシュレージエンの森へ

文学部 植田 康成

0. 1988年4月1日から1990年3月31日の2年間、家族とともに研究滞在をしたフライブルクは、ドイツ連邦共和国（西ドイツ）の南西の片隅にある人口17万の大学町です。大学町としてのフライブルクは、日本人にとっては、現象学の哲学者フッサールと生の哲学者ハイデッガーの名前と結び付いていると思われま

す。とりわけ、昨年は、ハイデッガー生誕（1889年）100年記念ということで、フライブルク大学では連続講演も行われました。ハイデッガーとナチズムとの関わりが、論議の的になったのですが、私は哲学を専門としている者ではありませんので、ここでは、フライブルク大学本館玄関上壁に刻み込まれている「永遠のドイツ精神のために Dem ewigen Deutschtum」という碑文をめぐる、碑文を取り外せという学生たちの抗議に対し、大学当局は、フライブルク大学がかつて国家社会主義（ナチズム）と否定しようもなく深く関わった（ハイデッガーは、ナチ政権下、フライブルク大学学長に選ばれ、ナチ賛美の就任演説をした）という事実と対決するよう促す契機としても、碑文をそのまま存続させる決定を下した、ということをも1つのエピソードとして言及するにとどめます。

1. フライブルクの町は風光明媚で知られる「黒の森 Schwarzwald」の入口に当たる町でもあります。50メートル近くにもなる Tanne（樅）や Fichte（松）がうっそうと茂っていることから「黒の森」といわれているのですが、実際は山の尾根をアスファルト道路が観光用に走っていたり、山頂近くまで広大な牧草場が広がり、夏には牛が放し飼いにされ

て、まったく長閑な光景を展開しています。日本語の森や山という概念から抱くイメージとは大分違います。

長閑さ、風光明媚さは、しかし、表面的なもので、現実には苛酷で、この「黒の森」でも、公害による森の死滅が深く進行しているのです。いわゆる「酸性雨」による立ち枯れが至るところにみられます。一番の原因は、自動車の排気ガスといえるでしょう。交通の面からいうと、この「黒の森」が物流を妨げている一番の障害となっており、フライブルクから「黒の森」を通り抜けて東に走っている国道31号線は、常に満杯状態です。沿線の住民は排気ガス公害に音をあげているのです。フライブルク郊外のこの国道沿いの人々は道路拡張を願っているのですが、「黒の森」の中にある村や町の住民は、これ以上交通量が増えることに反対し、道路拡張案は長年来立ち往生したままです。

「黒の森」のすばらしい眺めを満喫しながら、国道31号線を東に走って、避暑、ウインタースポーツと夏冬問わず客が押し寄せる森の中の町ノイシュタットを過ぎ、Bärental（熊の谷）にかかる大きな橋を渡りかけると、右手に巨大なゴミの山が見えてきます。その上には、無数のかもめが飛び交っています。夏には、悪臭が漂い、それまでの黒の森の美しい景観に対する賛嘆の念は、瞬時に消え去ってしまいます。この谷には、フライブルクを始めとするライン側上流地域の各都市のゴミが捨てられているのです。西ドイツでは、さまざまなゴミの処理が、それに伴う公害問題を含め、大きな政治課題になりつつあります。黒の森の中の休

暇町ノイシュタットは、そのようなゴミ処理問題を、極端な形で、人々の意識にのぼせてくれます。

2. 今年は2月下旬にめぐってきたのですが、イースターの休みを利用して、ポーランドに家族で旅行することにしました（2月24日から3月2日）。たまたま、1週間食事付き1人500マルク、というポーランドバス旅行のコミューナルが新聞に載っているのを見つけたからです。それに、ポーランドに住むドイツ人たちのドイツ語を調査してみたいと、かねてから考えていたからでもあります。

フライブルクを朝9時に出発して、最終目的地ポーランド、オーバーシュレージエンにある村イミエリンについたのは、翌日朝7時頃でした。東ドイツを横切って、やがて丸1日の行程でした。ほこりっぼい広場にバスがとまると、そこにはすでに宿泊先の家族の方たちが、出迎えに来ていました。

出発前、旅行社による説明では、ドイツ語が通じる家庭に宿泊することになるから、言葉に関しては心配ないということでした。

私たちの家族が3日間お世話になったガウリコヴィッツ家についていいますと、ドイツ語をある程度不自由なく話せるのは、おじいさんのパウル（70）だけで、おばあさんのマリア（70）は、ほとんど受身的に話が分かるだけでした。お父さんのヨーゼフ（42）、お母さんのテレサ（40）、子供のクリストフ（18）、ローベルト（12）は、ポーランド語しか話せず、受身的にもドイツ語はまったく理解できません。ですから、私たちとの会話はすべてパウルおじいさんを通してドイツ語で行うしかありませんでした。

ガウリコヴィッツ家におけるこのような言語状況については、歴史的な事情が絡んでいます。オーバーシュレージエンは、かつてはドイツ領だったのですが、第2次世界大戦でドイツが負けたとき、連合国側内部での協定に基づいて、ポーランドが領土とすることになったのです。パウルおじいさんの言い方では、ポーランドは、オーバーシュレージエン

における工業地帯が欲しかったのだということになります。

戦後ポーランドが社会主義国になったとき、ここに居住するかつてのドイツの人々は、公にはまったくドイツ語を話すことを禁じられ、ポーランド語を話さざるを得なくなったのです。ミサもドイツ語で行うことができなくなったのです。ですから、オーバーシュレージエンのドイツ人で、戦後生まれの人々は、まったくドイツ語が話せないのです。



ガウリコヴィッツ家の人々と筆者の家族

イミエリンに着いたその日は、昼過ぎまで休息した後、パウルおじいさんとテレサと一緒に、家の前にある丘に登ってみることにしました。見渡す限り、遙か遠くまで大きな工場が立ち並んでおり、わずかにあちこちに森の緑が残されているだけです。イミエリンの村の近くには、大きなため池があり、それは炭坑から汲み上げた水でできたものだったということでした。

オーバーシュレージエンの森にいたるポーランドの土地の大部分が、砂地です。オーバーシュレージエンの工業地帯では、石炭採掘に伴って、地下水が汲み出されるため、土地の表面が乾燥し、ほこりっぼくなっているのです。赤松が主体の森の木々も、それほど高くなく、伸び悩んでいるようでした。ここオーバーシュレージエンでも、自然破壊は深く進行しており、森の木々は、悲鳴を上げているように思えました。

3. イミエリン滞在2日目に、近くにあるカトヴィッツの町を訪れました。ここで私たち

一行が見たのは、決して名所旧跡ではなく、オーバーシュレーゼン的一大工業都市カトヴィッツにおける公害の実態でした。

カトヴィッツは、まるで炭坑の中に町があるという感じで、至るところにリフトの櫓が見え、赤茶色の煙を吐き出す製鉄工場、精錬場と大きな工場が立ち並んでいます。

バスを降りて歩きながら見学した町の一角でみたのは、道路の敷石や、アスファルトを覆いつくしている炭塵でした。しかも、その炭塵にはさまざまな重金属が含まれているということです。案内役を自ら引き受けてくれたイミエリン出身の国会議員パウルさんの説明によると、カトヴィッツに住む子供たちのほとんどが喘息にかかっており、子供たちはめったに家から外に出ないということでした。そう言われてみると、通りで遊んでいる子供たちの姿を見かけることは、まれでした。住宅の壁は、黒くすすけています。市内電車の軌道は、あちこちでゆがみ、波をうっています。ちょうど真下に坑道があり地盤沈下がいたるところで起こっているのです。



カトヴィッツの町の一角

カトヴィッツで、私たちを含む一行を世話してくれたキリスト教関係団体の事務所で、代表者からポーランド情勢も含めて説明を受けた時、初めてわかったのですが、この旅行企画は、単なる観光旅行ではなく、いわば民間による交流を促進するのが目的だったのです。具体的には、西ドイツとポーランドの青少年の交流を計るのが狙いで、とりわけオーバーシュレーゼンで喘息に苦しんでいる子

供たちを西ドイツのシュバルツバルトで静養させてあげるための可能性を作ってあげようというものだったのです。

4. 1990年10月3日に東西ドイツの統一がなることに決まり、その過程で、オーダー・ナイセ線を統一後のドイツとポーランドの国境とすることで両国間に最終な合意がなりました。

この合意は、いわばゲンジャーの外交方針が西ドイツ与党の右寄りの意見に勝利したものです。これによって最終的にポーランド国内に押し留められることになったシュレーゼン、オーバーシュレーゼンに居住しているかつてのドイツの人々は、このニュースをどのような思いでうけとめたのだろうか。

たった3日であったが、親しく泊めてもらったガウリゴヴィッツ家のパウルおじさんとマリアおばあさんは、自分たちはドイツ人だと断言するのですが、その息子ヨーゼフは、内面でも自分はポーランド人だといったことが思い出されるのです。国籍が帰属を決めるといえるのは、外的なことで、最終的にはどの言語を母語としているかが、自己のアイデンティティーを決定しているといえるのでしょうか。



イミエリンの南の方にあるビルケナウのナチ強制収容所跡

（以下、本文の続きがぼやけて読めず、一部を省略）